

サイドのために

——アーレントとパレスチナ問題——

小 森 謙 一 郎

死にゆく人々は目にし、感づき、分かっていた、
自分たちの死が世界の死であるということ。

(ジャン・ジュネ『恋する虜』)

一 不可避の問い

パレスチナ問題について、アーレントはどのように考えていたのか？

この問いに答えることは容易ではない。彼女の履歴と関連する資料、そしてまた歴史——あるいは決して十分には書くことのできない無数の事実——が複雑に絡み合っているからである。問題自体も深刻化するばかりで、解決から

はむしろ遠ざかっている。しかもそこにはひとつの強力なイデオロギーが作用しており、これは国家や言語の枠組みを超えて一個人の履歴と文字資料のあいだに齟齬を生じさせるほど根深いのだ。錯綜する情報もしばしば歪められ、現実を把握すること自体が難しい。だが、ここに賭けられているのは「学問の自由」であり、究極的には「内面の自由」なのである。

ひとまず、同定可能な事実を確認することから始めよう。

一九三三年七月、ナチス・ドイツの誕生から半年足らずのうちに、アーレントは逮捕された。その頃住んでいたベルリンで、シオニストの地下運動に協力したためだった。幸運にも一週間程度で釈放されると、すぐにパリに逃れる。フランスでもシオニストの組織で活動、とりわけ「青年アリアー」に尽力した。目的はヨーロッパのユダヤ人青少年を祖先の地に届けることにあり、一九三五年にはアーレント自身も一度パレスチナを訪れている。同年に発表された論考のタイトル——「若者の職業の再編成」「若者の指導者 マルティン・ブーバー」「若者は故郷をめざす」——は、当時の彼女の問題意識を如実に反映していると言えるだろう。^①

しかし一九三九年九月に独仏開戦、ドイツ出身だったために敵性外国人とみなされたアーレントは、南西部のギュルス収容所に送られる。翌年のフランス降伏時に脱出、一九四一年にはニューヨークに到着した。アメリカでもドイツ・ユダヤ人向けの新聞に寄稿し、ヒトラーに対抗するユダヤ軍の創設を訴えるなど^②、ユダヤ人の民族的存続を念頭に置いた記事を多数執筆することになる。

他方、シオニズムの主流派がユダヤ人の「郷土」^{ホム・ランド}を超えて主権国家の建設をめざすようになると、アーレントは運動全体から離れていく。たしかにユダヤ人にも住む場所は必要で、その「家」^{ヘム}をパレスチナという「地」^{ランド}に建てることには歴史的意義もあるだろう。だが、それにはまず現在の住民たるアラブ人の理解を得るのにならなければならず、

先住者の存在と意向を無視すべきではない。彼女はまた国民国家ネーション・ステートという形式自体に疑念を抱いており、ユダヤ人とアラブ人が共存できる一種の連邦制を構想していた。⁽³⁾

そのため一九四四年一〇月のアメリカ・シオニスト機構の年次大会で、純然たるユダヤ人国家を建設する方向性が固まると、アーレントは明確に異議を唱える。この決議はアラブ人の排除——軍事的な排除——を主張していた修正派に与するものと映ったのだ。論文「シオニズム再考」は、当の会議をシオニズムの大きな転換点とみなし、その方向性を強く非難している。⁽⁴⁾

そして戦後の一九四八年五月一四日、イスラエルの建国が宣言された。周囲のアラブ国家は宣戦を布告、第一次中東戦争となる。とはいえ、前年に採択された国連の分割決議案以来、パレスチナはすでに内戦状態にあった。デイル・ヤシン村では、アラブ住民の虐殺事件も引き起こされている。⁽⁵⁾一連の事態の結果、七〇万から八〇万人の難民が生じ、パレスチナ問題が本格的に始まる。イスラエル国内にとどまったパレスチナ人も実質的に二級市民として扱われ、七〇年後の今日イスラエル国会はユダヤ人へのみ自決権を認める「国民国家法」をついに可決した（ここまでの過程全体を代議制議会主義による民主主義の合法的篡奪として捉える必要があるだろう）。だがもちろん、その間にも確認すべき事実——大災厄ナツバから連綿と続く人種差別と人権侵害と集団殺戮の歴史——がある。

もつとも、この観点からすると、『全体主義の起源』は画期的な著作だったはずである。帝国主義を主題とする第二部最終章「国民国家ネーション・ステートの没落と人権の終焉」には、すでに一九五一年の英語初版から「最近のイスラエル国家の例」に関する言及がある。⁽⁶⁾五五年のドイツ語版からは、「人植してから領土を奪う」政策と「アラブ難民」の存在に関する記載も追加されている。⁽⁷⁾さらに『エルサレムのアイヒマン』（一九六三年）が、いわゆる「イスラエルの大義」を国際的に訴えるための一種の見世物スペクタクルとしてアイヒマン裁判を捉えつつ、殲滅シヨアの担い手を利用したこの国策をあくまで

も批判的に論じていること——そしてそのために引き起こされた巨大な論争においても何ら主張を変えなかったこと——を考慮するならば、戦前から少なくとも六〇年代半ばまで、アーレントの姿勢は一貫していたことになるだろう。

つまり、ユダヤ人も居住地を必要とする以上、何らかの「土地」はたしかに不可欠だが、しかしそれを「奪う」べきではない。軍事力を背景とした土地取得は植民地主義的暴力以外の何ものでもなく、ホロコーストをはじめとするどのような出来事も、決してこれを正当化することはできない——アーレント自身が直接そう述べているわけではないにせよ、アイヒマン論争までの彼女の立場を簡潔に示すなら、およそこのように要約できるだろう。

しかしながら、ここでひとつの転機が訪れる。一九六七年の第三次中東戦争である。スエズ運河の利権をめぐる第二次中東戦争（一九五六―五七年）後、関連地域では英仏の旧帝国主義勢力に代わって、米ソの影響が強まるようになっていた。イスラエルは周囲のアラブ国家に承認されおらず、地理的には孤立していた。ソ連は中東での支配力を高めるべくアラブ側を支援、これに応じる形でエジプト、シリア、ヨルダンがにわかに軍備を整えた。そして一九六七年五月、第二次中東戦争後に駐留していた国連軍の撤退をエジプトが要求、さらにアカバ湾から紅海へ通じるチラン海峡の封鎖を宣言したことで、事態は一気に緊迫した。かくして機先を制すべく攻撃に出たイスラエルは、六月五日から一〇日の六日間で大勝利を収める。結果的に、エジプトからはシナイ半島とガザ地区、シリアからはゴラン高原、ヨルダンからはヨルダン川西岸地区全域を奪うことになった。

これに対して一九七三年一〇月六日、エジプトとシリアはそれぞれシナイ半島とゴラン高原に展開していたイスラエル軍を攻撃、第四次中東戦争が勃発した。作戦はイスラム暦における断食の月、またユダヤ教の祭日である贖いの日יום כיפורに開始されたため、これらの名をもって呼ばれることもある。不意を突かれたイスラエルも徐々に反撃、アメリカの支援も受けて優勢な形で停戦を迎えた。中東地域におけるイスラエルの軍事的優位とそれを擁護するアメリ

カという構図は、こうして現在まで続くことになる。

ところで、以上の一連の事態に対して、アーレントはどのように反応したのか？ これはパレスチナ問題に関する彼女の考えを検討するにあたって避けることのできない問いである。そしてこの問いについては、エリザベス・ヤングブルーエルによる有名な伝記の次のような一節が、ひとつの答えとしてあらかじめ与えられている（研究者たちにはよく知られた一節だが、やや長くとも全文の再読が必要だ）。

一九六七年の〔第三次〕中東戦争の間、ハンナ・アーレントはイスラエルの勝利を情熱的に誇りとした。普段はイスラエルの政策に批判的だったのに、友人の一人が述べるところによれば、「戦争花嫁のように」振る舞った。軍事的関与について、アーレントは攻撃的なものと防衛的なものとを截然と区別し、一九五六年の〔第二次中東〕戦争は愚かしいものだったが、一九六七年の戦争は理に適うものだと考えた。一九六七年一〇月〔*ibid.*〕の六日間戦争を振り返りながら、彼女はメアリー・マッカーシーにこう書いている。「イスラエルに真の破局が訪れれば、他のほとんど何よりも、私の心を深く揺さぶるでしょう」。一九七三年、エジプトとシリアが贖いの日ヨム・キプールにイスラエルの領土に侵攻したとき、破局は差し迫っているように見えた。そして今回はイスラエルが破壊されるかもしれない、とアーレントは恐れた。〔第四次中東〕戦争は一〇月九日〔*ibid.*〕に始まった。それはアーレントがフランス・テレヴィジョンのためにロジェ・エレラとの一週間にわたるインタヴューを始めた日だった。インタヴューの書き起こしは、彼女の心を占めていた思いを反映している。「ユダヤ人はイスラエルでは一つになっています」と彼女は言った。そしてさらに進んで、ユダヤ教は国民宗教です、と何の批判もなく説明した。ロジェ・エレラはスファルディ系ユダヤ人で、パリのカルマン・レヴィ出版社の叢書「ディアスポラ」の編者だった。

二人は一緒にコロンビア大学ロースクールで開かれた会議に行ったが、そこではイスラエルの大義を援助するためのさまざまな提案が検討された。アーレントは一九六七年にしたのと同じように、ユダヤ防衛連盟に寄付をした。また戦争がテル・アヴィヴにいる親戚の安全を脅かした場合には、すばやく財政援助ができるよう準備を整えた。一〇月の第二週に戦闘の形勢が変わると、彼女は『精神の生活』第二部「意思」の草稿に再び着手しようとした。「私は仕事に戻るのにちょっと支障があるのですが、それはもちろん主として予期しえなかった今回の「歴史」の勃発のせいです」と彼女はメアリー・マッカーシーに書いた。⁽⁸⁾

あえて一言で要約するならば、アーレントは第三次中東戦争でも第四次中東戦争でもイスラエルを支持した、というのである。「普段はイスラエルの政策に批判的だったのに」、一九六七年にも一九七三年にも「ユダヤ防衛連盟に寄付をした」。

本当だろうか？ 仮に本当だったとして、彼女の姿勢はいかにしてほとんど一変するにいたったのか？

しかしながら、伝記の記述が本当かどうかを検証する作業——引用中〔*cit.*〕とした箇所には懐疑を抱くべき根拠がある——に着手する前に、いわゆる先行研究を押さえておく必要がある。つまりこの一節について同じ疑問を抱いた人物がすでにおり、その指摘はここでの議論に直結するということだ。それどころか、彼自身が問題の当事者のひとりにほかならず、しかもヤング・ブルーエルは彼に対してひとつの間違いを認めているのである。

まずは彼の言葉に耳を傾けてみよう。

二 疑問と指摘

一九八五年の論文「差異のイデオロギー」のなかで、エドワード・サイードは次のように述べている。

ハンナ・アレントのことを考えてみよう。パレスチナにおける二民族共存のためにユダ・マグネスやマルティン・ブーバーが重ねてきた努力に、彼女は長年のあいだ密接に関わってきた。戦前はユダヤ人のパレスチナ移住のために働いたものの、主流派シオニズムに対してはつねに批判的だった。このことは論集『パリアアとしてのユダヤ人』や、『全体主義の起源』及び『エルサレムのアイヒマン』に含まれる様々な指摘から証明される。だが一九六七年、彼女はユダヤ防衛連盟に寄付金を送り、七三年にもそうした。この情報——アレントの伝記のなかでエリザベス・ヤング＝ブルーエルが一連の矛盾に何ら気づくことなく伝えている情報——は、注目すべきものだ。シオニズムがパレスチナ人に行ったことに対して、「アレントは」他の点ではきわめて同情的かつ反省的な人物だったのだから。マグネスの支持者たちやメイル・カハネは、この不一致とどう折り合いをつけたのだろうか？ 難点を解消しようとするヤング＝ブルーエルの暗黙の（おそらくは無意識の）試みも意義深い。

一九七三年のイスラエルに対するアレントの興奮した関わり方について述べる際、ヤング＝ブルーエルは次のような文章で始めている。「エジプトとシリアが贖いの日ヨム・キプーにイスラエルの領土に侵攻した」。注記されてしかるべきことだが、エジプトとシリアが実際に侵攻したのは、それぞれシナイ半島とゴラン高原、つまり一九六七年にイスラエルが占領したエジプトとシリアの領土だった。願望はこのようにして真実を踏みにじる！^⑨

サイードの見解は明確だ。アーレントは「主流派シオニズムに対してはつねに批判的だった」。先述のように、事実そのことは「シオニズム再考」(を収めた論集『パリアアとしてのユダヤ人』)や『エルサレムのアイヒマン』から読み取れる。彼女はまた「シオニズムがパレスチナ人に行ったことに対して、きわめて同情的かつ反省的な人物だった」。やはり先述のように、事実そのことも「入植してから領土を奪う」政策と「アラブ難民」の存在について明記した『全体主義の起源』から読み取れる。⁽¹⁰⁾しかし、ヤング⇨ブルーエルの伝記によれば、「一九六七年、彼女はユダヤ防衛連盟に寄付金を送り、七三年にもそうした」。

これは本当なのだろうか? 仮に本当だったとして、「ユダヤ人とパレスチナ人の二民族国家論を提唱していたユダ・」マグネスの支持者たちや「ほかならぬユダヤ防衛連盟の設立者である」メイール・カハネは、この不一致とどう折り合いをつけたのだろうか?。念のため換言すれば、こうなるだろう——それまでイスラエル国家の政策を鋭く批判していた人物が、一九六七年以降は唐突にこれを支援するようになったのだとしたら、その転向、その「不一致」には、左右どちらの側も首を傾げるよりほかはないのではないか?

サイードはこうした疑問を提示した上で、さらにヤング⇨ブルーエルの「無意識」あるいは「願望」を指摘する。第四次中東戦争でエジプトとシリアが攻め入った「シナイ半島とゴラン高原」は、第三次中東戦争で両者が失った領土にほかならない。にもかかわらず、伝記はあたかもそれが元来、「イスラエルの領土」だったかのように記述している。いわゆる大イスラエル主義の欲望が、アーレント自身の弟子にして精神分析にも通じていた著者を導いているのだ(それゆえ「真実を踏みにじる」ヤング⇨ブルーエルの看過⇨乗り越え override は一層注目に価するだろう)。

もつとも、ここで当の伝記『ハンナ・アーレント——世界への愛のために』が翌年の全米ユダヤ図書賞歴史部門にノミネートされていることを考慮するなら、「願望」はもはや著者個人の「無意識」には還元できなくなる。事実、

この本が出版された一九八二年には、イスラエルが内戦状態のレバノンに侵攻、実質的な目的はPLOの壊滅——そして民族的存在に関わる資料を多数保存していたパレスチナ研究所の破壊——にあった。結果としてPLOはベイルートからチュニスへ本拠地を移さざるをえなくなり、さらにサブラとシャティエーラの難民キャンプでは、数知れぬパレスチナ人が文字通り虐殺されている。だが年末の国連総会でこの事件をジェノサイドと非難する決議には、イスラエルはもちろんアメリカも棄権をもって応じた（パレスチナ人のあらゆる抹消が「世界への愛」の条件であるかのようにだ！）。

他方、ヤングブルーエルは、サイードの論文が掲載された『クリティカル・インクワイアリー』誌に手紙を書いたらしい。一九八七年冬号の編集後記には、「エドワード・サイードへの返答」と題された文章が掲載されている（具体的な日付や挨拶文はなく抜粋と思われる）。彼女はそこでひとつの「間違い」を認めた。

一九八五年秋号（四七頁）で、サイード氏はアーレントがパレスチナにおける二民族国家論を支持しながら、いかにして同時に（一九七三年に）ユダヤ防衛同盟を支持できたのか、と問うています。サイード氏がこの情報を得たのは、私が書いたハンナ・アーレントの伝記からで、脚注のひとつにそう書かれていました。この脚注は後の版では訂正されていますが、アーレントが支持したのは全国ユダヤ運動で、最初からそうなっているべきでした。これは私の間違いで、原稿段階で注の箇所を移し変えた際に生じたのですが、大変遺憾に思っております。^①

「ユダヤ防衛同盟」[Jewish Defense League]ではなく「全国ユダヤ運動」[United Jewish Appeal]だった、というの

が「間違い」の内容であることは理解できる。だが、「脚注 footnote」と「後の版 later editions」というのが、よくわからない。先ほど見た一節は、あくまでも本文のなかの一節であり、そこに脚注はない（出典を示す後注はあるものの「ユダヤ防衛同盟」とは関係がない）。また引用はあえて第一版第一刷から行っており、しかも第二版が出るのは二〇〇四年のことである（したがって「版」というより「刷 printings」のことを言っているはずだが、それも含めて後に見る）。いずれにせよ、「原稿段階で注の箇所を移し変えた際に生じた」と言われても、どこか雲をつかむような話で、技術的なミスを「間違い」の要因にしている印象を受ける。

『クリティカル・インクワイアリー』誌もそのように感じたのかどうかはわからないが、編集部はともかくサイド自身に手紙のことを知らせたらしい。編集後記には、ヤング・ブルーエルの文章の直後に、サイドの返答も掲載されている（こちらも抜粋と思われる）。これを読む限り、サイドも同じ印象を抱いたようだ。

エリザベス・ヤング・ブルーエルがハンナ・アーレントとイスラエルについて述べている文脈では、彼女の「訂正」はほとんど意味がないように思われます。事実、彼女の本の第一版には、アーレントがJDLに寄付したという脚注はあり、ません。その情報は本文の四五六頁にあり、アーレントは「一九六七年にしたのと同じように」一九七三年にユダヤ防衛同盟にお金を送ったと、ヤング・ブルーエルは（脚注なしに）記述しているのです。この文脈で重要なのは、ヤング・ブルーエルがアーレントを熱烈なシオニストだったことにしている点です。イスラエルの軍事的勝利を喜び、「戦争花嫁」のように振る舞った、と。（しかし）アーレントはしばしば反シオニズムないし非シオニズムという評価を与えられてきたのであり、その主たる理由は彼女がユダ・マグネスと活動をもとにしたことにあります。マグネスは一貫して領土主義的シオニズムに強く反対していたのでした。したがっ

て、論文「差異のイデオロギー」のなかで私が疑問を付したことはそのまま、ヤングブルーエルは何の回答もしておりません。関係のないことをもって答える、あるいは答えないことをもって答えることができると考えている点で、彼女は徹候的な間違いを犯しているのです。JDLと全国ユダヤ運動は、方法は異なるにせよ同じシオニストであり、排他的なのですから。アーレントのような人物がいかんしてイスラエルに関する立場を右側に転じることができたのか、今回よりもっと上手な説明が私たちには必要です。そして一九七三年にエジプトとシリアに侵略されたシナイ半島とゴラン高原はイスラエルの領土だったと明言しているヤングブルーエルが、彼女自身の間違いについて——印刷工の誤りではなく——まだ何も言っていないのはどういうことなのか、やはり説明が必要です。事実、そのときシナイ半島とゴラン高原はエジプトとシリアの領土だったのであり、今でもそうなのですから。ここでの過失や事実に関わる誤りは、とても意味深いように私には思われます。それらをヤングブルーエルは続版で訂正していません。⁽¹²⁾

サイードの見解はここでも明確だ。ヤングブルーエルは提示された疑問と指摘に実際のところ答えていない。つまり「ユダヤ人とパレスチナ人の共存を訴えてきた」アーレントのような人物が「一九六七年の第三次中東戦争以降」いかにしてイスラエルに関する立場を右側に転じることができたのか」という疑問と、「一九七三年に第四次中東戦争が勃発した」そのときシナイ半島とゴラン高原は「イスラエルによって占領されていたとはいえもともと」エジプトとシリアの領土だった」という指摘である。

これに対して、伝記の著者は「関係のないことをもって答える」。すなわち、アーレントが寄付したのは「ユダヤ防衛同盟」ではなく「全国ユダヤ運動」だったのだ、と。しかしサイードからすれば、両者は「同じくシオニストで

あり排他的」なのである。「答えないことをもって答える」ヤング・ブルーエルは、ここでも看過^{オウヴァー}・乗り越え^{アライド}を貫いている。つまり依然として「徴候的な間違いを犯している」のであって、伝記においても手紙においても、同じ「願望」と「無意識」が不都合な事柄を無視している。しかも精神分析を学んでいた——そしてアンナ・フロイトの伝記も出すことになる——彼女自身がそのことに気づいておらず、だからこそ「ここでの過失や事実に関わる誤りはとても意味深い」ことになるだろう。その検証作業にサイドがみずから携わることにはなかったものの、あらためて着手してみる意義は今日なお失われていない。

だが、ここで補足しておくべきことが少なくとも三点ある。

まず、「ユダヤ防衛同盟」の設立時期についてである。サイドはこの組織がメイエル・カハネによって設立されたことを踏まえていたが、その時期は一九六八年、第三次中東戦争の後だった。つまり「アーレントは一九六七年にしたのと同じように、ユダヤ防衛連盟に寄付をした」というヤング・ブルーエルの文章は、そもそも成り立たないのである。この事実がヤング・ブルーエルに「訂正」を促したわけではないことも、「徴候的な間違い」のひとつとみなすことができるだろう（伝記全体のなかで「ユダヤ防衛同盟」の名が出てくるのはこの一箇所にすぎず、それが「全国ユダヤ運動」に変わるのなら完全に皆無となる。だが、それならなぜこの組織名は「原稿段階で」紛れ込んだのか?）。次に、「ユダヤ防衛同盟」は端的に言って過激組織であり、サイドは「方法は異なる」としていたものの、その過激さは「全国ユダヤ運動」とは比べものにならない点である。というより、ほかならぬサイド自身がそのことを経験していたのであり、論文「差異のイデオロギー」が発表されたのと同じ一九八五年には、コロンビア大学の研究室が放火されたのだという。⁽¹³⁾『パレスチナ問題』（一九七九年）の著者がさまざまなグループの標的になっていたであろうことは察するに余りあるが、彼の著作やインタビューからする限り、誹謗中傷や脅迫のみならず、物理的な危害

を加えるべく実際に試みた組織は「ユダヤ防衛同盟」くらいのものだろうか（ヤングブルーエルはこうした事実を知らなかったのだろうか？）。

最後に、「それら（過失や事実に関わる誤り）をヤングブルーエルは統版で訂正していないのです」というサイードの手紙の最終行についてである。前述のようにヤングブルーエル言う「後の版」が何のことなのか判然とせず、またサイード自身が参照しているのも「彼女の本の第一版」である以上、この最後の一文は一種の戯れな皮肉とみなすことができるだろう。もともと、ヤングブルーエル言う「訂正」が水面下でなされた第一版の重版が存在するため（さしあたり第三刷と第四刷を確認することできた）、サイードもこれをあえて「統版 subsequent editions」と呼んでいるのかもしれない。同様の所作は「原稿段階で注の箇所を移し変えた際に「間違い」が「生じた」というヤングブルーエルの文言を、「印刷工の誤り」と誇張的に解釈している箇所にも見てとれる。いずれにせよ、ヤングブルーエルには彼が必要だとする「説明」をする気がなく、またできもしないであろうことを、サイードはおそらく十分にわかっていた。

しかし、それだけではない。

三 残されたもの

なぜなら、「ヤングブルーエルは統版で訂正していない」という評言は、いわば事後的に、妥当することになるからである。先に触れた通り、伝記の第二版は二〇〇四年に出されている。アーレントの死からは約三〇年後、そしてサイードの論文からは約二〇年後のことだ。

この第二版に付した序文の冒頭部で、著者ヤング・ブルーエルはこう述べている。私は新たな若い読者のために伝記を改訂することをとまどき考えたが、いつもそのままにする方がよいと思った、この本はアーレントの生を彼女が経験した世界のなかで描いているのだから、と。⁽¹⁴⁾その上で彼女はひとつ注を付し、そこでさらに次のように書いている。

伝記（一九八二年の第一版）を改訂しようとは思わなかった別の理由は、自分の知る限り、事実に関わる重大な誤りはおよそなかったからである。ただ例外が一つあって、これは恐ろしい結果をもたらすことになり、深く後悔している。四五六頁に私はこう書いた。アーレントは一九六七年と一九七三年にユダヤ防衛連盟に寄付をした、と。この誤り（今は訂正されている）が生じたのは、彼女が寄与した組織と拒絶した組織の長々しいリストを作成していたときだった。照合時に私はミスをしたのだ。実際のところ、アーレントが寄付したのは、全国ユダヤ運動（UJA）だった。ユダヤ防衛連盟（JDL）は拒絶していたのであり、彼女とその周囲のリベラなユダヤ人の見解によれば、これはファシシ的な組織だった。このような組織には決して寄付などしなかっただろう。文芸批評家、活動家、そして政治評論家でもある秀逸なパレスチナ人エドワード・サイードは、私のミスに乗じて『クリティカル・インクワイアリー』誌（一九八五年秋号、四七巻）でこう論じた。アーレントはパレスチナ人の苦境に対して感じるところはなかったのだ、と。私はサイードに手紙を書いて自分の誤りがどのように生じたのかを説明し、その責任をとろうとしたが、彼の論考「差異のイデオロギー」はそれから再び印刷され、間違った情報が広まったのである。⁽¹⁵⁾

ここまで確認してきたことを振り返ってみるなら、一文一文がほとんど驚愕に値する。最も驚くべきは、「間違った情報が広まった」という「恐ろしい結果」が「パレスチナ人エドワード・サイード」のせいにされている点である。一九八五年の論考「差異のイデオロギー」は、論集『収奪のポリティクス』に収められ、一九九四年に「再び印刷」された。サイードの文章はたしかにそのまま、ヤング・ブルーエルが『クリティカル・インクワイアリー』誌に出した手紙とそれに対するみずからの返答にも言及していない¹⁶。

しかし、このことが「間違った情報が広まった」原因なのか？ そもそもその原因が「私のミス」にあることは明らかだ。そしてヤング・ブルーエルの伝記自体がすでに、広く知られていたからこそ、サイードもまたその一節をみずからの論考で検討するにいたったのであり、この順序を変えることはできない（同様に第一版を底本とする日本語訳も「間違った情報」を広めている）。論集に再録される際に「訂正」がなされるべきものと彼女は考えていたのかもしれないが、他人の著作のなかで自著の間違いが正されることを期待するのは筋違いだと言わざるをえないだろう。「手紙を書いて自分の誤りがどのように生じたのかを説明し、その責任をとろうとした」と彼女は言う。だが、「重大な誤り」に気づかせてくれたサイードに感謝するどころか、反対にあえて「パレスチナ人」と名指しながら彼を非難している以上、ヤング・ブルーエルが実際に行ったのは悪質な——人種差別的潮流に裏打ちされた——責任転嫁以外の何ものでもない¹⁷。しかも「領土」に関する指摘については、結局のところ何も語らず、「訂正」もしていないのである（かくして真実の蹂躪^オ・看過^グ・乗り越え^ラは続く）。

さらに驚かざるをえないのは、「自分の誤りがどのように生じたのか」という当の「説明」が変えられていることである。『クリティカル・インクワイアリー』誌に出した手紙——直接「サイードに」書いたのではない——では、「原稿段階で注の箇所を移し変えた際に生じた」ことになっていた。しかし今度は、アーレントが「寄与した組織と拒絶

した組織の長々しいリストを作成していたとき」「照合時に私はミスを犯した」のだという。だとしたら、手紙で言われていた「注」はいったい何だったのか？ 第一版第一刷にそのような「注」は存在せず、そもそも不可解だったことはすでに見た通りだが、彼女の新たな説明は当初の説明が嘘だったことをみずから証明しているのではないのか？ そもそも彼女の言っていた「注」などそもそも存在しなかったのだとしたら、「長々しいリスト」の方にも同じ嫌疑をかけなければならないことになる。

そのことはまた「寄与した組織と拒絶した組織」という分類をも疑わなければならないことを意味する。実際、アーレントが関わったあらゆる組織を「寄与」と「拒絶」という二分法で一律的にリスト化することが、そもそも可能なのだろうか？ 時と場合によって組織のあり方自体が変わることは一般的にありうるし、それに応じてアーレントの関わり方が変わることもありうるのではないか？ そのような微妙な変化もすべて含めてリスト化することが本当に可能だったとして、ヤングブルーエルは伝記のうちのどこで当のリストと分類を参照しているのだろうか？

こう考えてくると、彼女の言う「誤り」そのものも怪しくなってくる。「アーレントは一九六七年と一九七三年にユダヤ防衛連盟に寄付をした」というのは「事実に関わる重大な誤り」だと彼女は認めていた。アーレントはこの組織を「ファッシオ的」と考えていたという。それどころか放火や殺人も厭わない過激派——結局のところテロ組織にほかならない——を、アーレントが支持していたことにしてしまった伝記は、たしかに「恐ろしい」（前述のとく「パレスチナ人サイド」は直接の被害者だった）。アーレントが「このような組織には決して寄付などしなかっただろう」というのも当然といえば当然だ。だが、She would never have contributed to itという表現は、過激派でなければ寄付しただろうという意味には必ずしもならない。つまり「ファッシオ的」ではなかったからといって「全国ユダヤ運動」に賛同する理由にはならず、そしてこの組織に「アーレントが寄付した」という証拠を、ヤングブルー

ルーエルは何一つあげていないのである。「実際のところ in fact」と言っているにもかかわらず。

アーレントが一九六七年にしたのと同じように一九七三年にも全国ユダヤ運動に寄付をしたというのは、本当なのだろうか？ この問いに対して、ヤング・ブルーエルの伝記は何も答えてくれない。むしろ「四五六頁」の当該箇所を含む一節は、彼女が事実として述べていることに疑念を抱かせる。冒頭で引用した際に「sic」として示した部分だが、六日間戦争が「一九六七年一〇月」だったとか（正しくは六月）、^{（誤）}贖いの日戦争が「一〇月九日」に始まったとか（正しくは六日）、こうした「誤り」は彼女にとってあまり「重大」ではなかったのだろう。第一版が全米ユダヤ図書館歴史部門にノミネートされたこともすでに述べたが、選考に携わったユダヤ人たちにとっても、歴史的に重要なことは事実的な正確さとは別のところにあつたに違いない。「後の版」とされた重版から第二版においても、第三次中東戦争の「一九六七年一〇月」は、そのまゝ誤つて記載されており、第四次中東戦争の勃発日こそ「一〇月六日」に訂正されているものの、これによつて今度は「ロジェ・エレラとの一週間にわたるインタヴューを始めた日」がひそかに変えられてしまつている。^{（誤）}さらに言えば、本文からは削除された「ユダヤ防衛連盟」が、索引では「四五六頁」という指示のまま残されているのだ！^{（誤）} こうした杜撰さを前にすると、もはや驚きを通り越して呆れるほかない（だが「学問の自由」の名に恥じないのどこまでだろうか？）。

かくして、「それら（過失や事実に関わる誤り）をヤング・ブルーエルは続版で訂正していないのです」というサイードの言葉が、あらかじめすべてを見透していたかのごとく想起されることになる。彼自身はしかし二〇〇三年九月二五日に「世界」を去つてしまつたために、二〇〇四年の第二版に付されたヤング・ブルーエルの序文には反論できなかつた。とはいえ、通常の読解力さえ持ち合わせていれば、「アーレントはパレスチナ人の苦境に対して感じるところはなかつたのだ」などと、サイードはまったく書いていないことは容易に理解できるだろう。念のため繰り返す

なら、アーレントに関して彼が述べていたのは、パレスチナ人に対して逆に「同情的かつ反省的な人物」、そのために「しばしば反シオニズムないし非シオニズムという評価を与えられてきた」当の人物が、ヤングブルーエルの伝記に描かれているように、一九六七年以降イスラエルに関する立場を一変させたのだとしたら、それは一体どのようなか、という疑問だった。「もっと上手な説明が私たちには必要です」とサイドは述べていた。

したがって、失われた「愛」とともに私たちに考えるべく残されているのは、依然として必要なその説明にほかならない。

- (1) Hannah Arendt, *The Jewish Writings*, edited by Jerome Kohn and Ron H. Feldman, New York, Schocken Books, 2007, p. xxxvii, 29-37 (『反ユダヤ主義——ユダヤ論集1』山田正行・大島かおり・佐藤紀子・矢野久美子訳、みすず書房、二〇一三年、三九—五一頁)。
- (2) *Ibid.*, p. 137 (一九七頁)。
- (3) *Ibid.*, p. 197 (二八六頁)。
- (4) Hannah Arendt, "Zionism Reconsidered" (1945), in *The Jew as Pariah: Jewish Identity and Politics in the Modern Age*, edited and with an introduction by Ron H. Feldman, New York, Grove Press, 1978 (「シオニズム再考」寺島俊穂訳、『パリアート』のユダヤ人』寺島俊穂・藤原隆裕宣訳、未來社、一九八九年)；in *The Jewish Writings, op. cit.* (「シオニズム再考」齋藤純一訳、『アイヒマン論争——ユダヤ論集2』齋藤純一・山田正行・金慧・矢野久美子・大島かおり訳、みすず書房、二〇一三年)。
- (5) アーレントはこの事件とその首謀者——にもかかわらず三〇年後には首相としてノーベル平和賞を受けることになる——メナハム・ベギンを非難する声明に署名してゐる ("New Palestine Party: Visit of Menachem Begin and Aims of Political Movement Discussed", in *New York Times*, December 4, 1948, p. 12)。なお、署名者のなかには、アルベルト・アインシュタインの名もみられる。
- (6) Hannah Arendt, *The Origins of Totalitarianism*, 1st ed., New York, Harcourt Brace, 1951, p. 255; *Elemente und Ursprünge totaler Herrschaft*, Frankfurt am Main, Europäische Verlagsgesellschaft, 1955 (1962), S. 480; *The Origins of Totalitarianism*, New ed. with

- added prefaces, New York, Harcourt Brace Jovanovich, 1973, p. 299; *Elemente und Ursprünge totaler Herrschaft*, München, Piper, 1986 (2001), S. 619 (『全体主義の起原——帝国主義』大島通義・大島かおり訳、みすず書房、新装版、一九八一年、二八五—二八六頁；新版、二〇一七年、三二二頁)。
- (7) Hannah Arendt, *Elemente und Ursprünge totaler Herrschaft*, op. cit., 1955 (1962), S. 465; *The Origins of Totalitarianism*, op. cit., 1973, p. 290; *Elemente und Ursprünge totaler Herrschaft*, op. cit., 1986 (2001), S. 600–601 (二一九—二一七頁；三〇一頁)。
- (8) Elisabeth Young-Bruhl, *Hannah Arendt: For Love of the World*, 1st ed., New Haven, Yale University Press, 1982, p. 455–456 (『ハンナ・アレント伝』荒川幾男・原一子・本間直子・宮内寿子訳、晶文社、一九九九年、六〇五—六〇六頁)。
- (9) Edward W. Said, "An Ideology of Difference", in *Critical Inquiry*, Vol. 12, No. 1, Autumn 1985, p. 47.
- (10) なお、サイードは当の一節を『パレスチナ問題』の冒頭で引用している (Edward W. Said, *The Question of Palestine* (1979), with new preface and epilogue, New York, Vintage Books, 1992, p. xxxix; 杉田英明訳、みすず書房、二〇〇四年、六頁)。「全体主義の起原」に対するサイードの肯定的評価は終生変わらなず、以後の著書でも同様の言及がある。
- (11) "Editor's Note", in *Critical Inquiry*, Vol. 13, No. 2, Winter 1987, p. 408.
- (12) *Ibid.*, p. 408–409.
- (13) Edward W. Said, "Returning to Ourselves" (1997), in *Power, Politics, and Culture: Interviews with Edward W. Said* (2001), edited and with an introduction by Gauri Viswanathan, New York, Vintage Books, 2002, p. 422 (「わたしたち自身への帰還」田村理香訳、『権力、政治、文化——エドワード・W・サイード発言集成(下)』大橋洋一・三浦玲一・坂野由紀子・河野真太郎・田村理香・横田保恵訳、太田出版、二〇〇七年、二三八頁) 及び Edward W. Said, "Between Worlds" (1998), in *Reflections on Exile: And Other Literary and Cultural Essays* (2000), London, Granta, 2001 (2012), p. 564 を参照 (後者は抄訳となった『故国喪失にまつての省察』(全二巻)大橋洋一・近藤弘幸・和田唯・三原芳秋・大貫隆史・貞廣真紀訳、みすず書房、二〇〇六—二〇〇九年には訳出されてない)。
- (14) Edward W. Said, "On Palestinian Identity: A Conversation with Salman Rushdie" (1986), in *The Politics of Dispossession: The Struggle for Palestinian Self-determination 1969–1994*, New York, Vintage Books, a Division of Random House, 1994 (1995), p. 112–113 (『パレスチナ人のアイデンティティ——サルマン・ラッシュディとの対話』川田潤訳、『収奪のポリテイクス——アラブ・パレスチナ論集成 1969–1994』川田潤・伊藤正範・齋藤一・鈴木亮太郎・竹森徹士訳、N T T 出版、二〇〇八年、一八七—一八九頁) では、この事件が一九八二年のイスラエルによるベイルートの破壊と関連づけられている。
- (15) Elisabeth Young-Bruhl, *Hannah Arendt: For Love of the World*, 2nd ed., New Haven, Yale University Press, 2004, p. x.
- (16) *Ibid.*, p. xxxv.

- (16) Edward W. Said, "An Ideology of Difference" (1985), in *The Politics of Dispossession*, *op. cit.*, p. 95 (「差異のイデオロギー」川田潤訳、『収奪のポリテイクス』、前掲書、一五八頁)。
- (17) これはまさに「被害者を非難する」一例だろう (*Blaming the Victims: Spurious Scholarship and the Palestinian Question*, edited by Edward W. Said and Christopher Hitchens, Verso, New York, 1988 (2001))。
- (18) Elisabeth Young-Bruhl, *Hannah Arendt*, 2nd ed., *op. cit.*, p. 455. ロビン・エレーラ自身のものと思われる説明文によると、インタヴューは「一日二時間、数日にわたって」行われた。そのとき、第四次中東戦争は「始まったばかりだった had just taken place」(Hannah Arendt, "The Last Interview: Interview by Rogger Errera. Un certain regard, ORTF, TV, France, October 1973" (1999), translated by Andrew Brown, in *The Last Interview and Other Conversations*, Brooklyn, N. Y., Melville House, 2013, p. 110)。これらの言葉は、契約条件をめぐって後日交わされた関連書類の内容とも符合する。そのひとつによれば、アーレントは「一九七三年一〇月九日から一三日まで」インタヴューに応じることに同意したのだった (The Hannah Arendt Papers at the Library of Congress, The Digital Collection, Series: Correspondence File, 1938-1976, n.d., Organizations, 1943-1976, n.d., Office de Radiodiffusion-Television Française, 1972-1974, Image 23)。したがって、インタヴューの開始日については、伝記の第一版第一刷は正しかったのであり、「訂正」はむしろ新たな誤りを生み出していることになるだろう。逆に言えば、第四次中東戦争とインタヴューの開始日が同じだと固執している点に、ヤング・ブルーエルの「無意識」「願望」「徴候的な間違」の一端が見出されるように思われる。なお、インタヴューの書き起こしは、最新の論集 Hannah Arendt, *Thinking without a Banister: Essays in Understanding, 1953-1975*, edited and with an Introduction by Jerome Kohn, Schocken Books, New York, 2018 にも収録されているが、多少の異同があるほか、エレーラの説明文もかなり省略されている。
- (19) Elisabeth Young-Bruhl, *Hannah Arendt*, 2nd ed., *op. cit.*, p. 556. 前注の箇所を含め、少なくとも第二版第七刷まで放置されている。

*引用した文献のうち邦訳があるものについては、原著と照合して訳文を適宜変更した。なお、本稿は平成二九―三〇年度武蔵大学総合研究プロジェクト及び JSPS 科研費 JP18K00111 の助成を受けている。